

私から見た日本の地域社会・外国人住民の今

中国遼寧省出身、時^{とき}光^{ひかる}です（本名）。

10年前、私費留学生として来日、大学卒業後、地域国際化協会にて3年間勤務、ボランティア日本語教室、外国人住民支援などの事業に携わり、はじめて外国人住民の現状を知ると同時に、地域のことに関心・意識をもちはじめました。現在JIAMで研修担当をしながら、多文化共生コーディネーターとして日々奮闘中です。

このコーナーでは、私の目を通して、「日本の地域社会、外国人住民の今」をご紹介します。皆様のまわりに多文化共生の現場があれば、ぜひ教えてもらい、いろいろ勉強させていただきたいと思います。日本全国、どこでも飛んでいきます。



皆様からのご意見、ご感想、現場情報など楽しみにお待ちしております。

TEL：077-578-5932 メール：h-toki@jiam.jp

国境を越えた人々、国境を越えたふるさと ～東北地方を支えるアジア人の女性たち～

全国市町村国際文化研修所教務部
多文化共生コーディネーター 時光

花巻空港の窓ガラス越しに、空一面赤く染まった夕焼けがとても綺麗に見える。雄大な大地と空、どこまでも広がっていくようだ。瞬きをすることすら忘れるほど満喫したいこの一瞬は、私の故郷の瀋陽^{しんやう}と重なって見えたためなのか、はじめて訪れた岩手県のはずだが、なぜか懐かしさを覚えた。

空港を離れ、しばらくすると、延々と続く田舎の風景と出会えた。草を焼いた煙の匂いが空気中に漂い、山々に囲まれ広々とした土地がどこまでも続いていく。バスもタクシーも姿を現すことなく、単線のレールはあっても電車はあまり見かけない、ゆっくりとした時間の流れを感じさせてくれる穏やかな風景・・・中国出身の私から見れば、先進国と呼ばれている日本は、東京や大阪のような近代都市ばかりではないかと思いがちだった。けれども、目の前の光景が自分の生まれ育った中国の小さな村とほぼ変わらないじゃないかと感じ、大変驚いた。

今回は日本の東北地方で暮らすアジア人の女性たちの現状を皆様にお伝えしたい。

◆アジア人の女性たちが日本の農村地域を支えている



姉妹都市（Concord）交流35周年の市民パーティー会場を飾った2200個の手作りエコ・キャンドル（2009年10月）

岩手県北上市国際交流ルーム（運営母体：オフィスキララ）は、市民の国際交流活動や外国人住民の生活をサポートしている拠点であり、多くのボランティアによって運営されている。今回は北上市国際交流ルーム代表の薄衣景子氏にご協力いただき、3人の中国人女性に会い、お話を伺った。

3人はいずれも、日本人男性と結婚され、10年以上も北上市で長く生活している「岩手県人」だ。来日して間もない頃、言葉や文化

の壁にぶち当たり、どれだけ苦い思いを経験してきたか数えきれない。何気ない会話や電話の受け答え、病院での受診、車の運転など、中国では当たり前のようにこなしていたことが、日本に来てから言葉を理解できないがために、日常生活の全てと言っていいほど何もかも不自由になった。もう日本ではやっていけないと思い、挫折しそうになった時もあったという。

「このままでは日本での生活が失敗に終わってしまう。子どもや家庭を守るためにも何とかしなければ!」と彼女たちは思った。彼女たちはしたたかな中国人女性らしく、懸命にこの困難に立ち向かおうと決心し、日本語と戦う日々が始まった。そして、時間と努力の積み重ねを経て、徐々に日本語を覚え始めた。すると、周りの日本人と少しずつ溶け込めるようになり、諦めかけた日本での生活に希望の光が差し込んできた。エンパワーメントされた彼女たちは、いくつもの壁を乗り越え、立ち止まることなく、更なるステップを踏み出した。岩手県で暮らす中国人女性が自分たちと同じ苦しい経験を繰り返してほしくないとの思いから、中国人女性同士が自発的に助け合う活動を始め、自ら積極的に地域活動にも参画するようになった。

「私は家事はもちろん、3人の子育てと畑仕事、その上におばあちゃんの介護までしているのよ。何一つ立派な職業をもっていないと言われるが、いろんな仕事をやっている。周りの他の中国人とフィリピン人の知り合いも皆一緒だよ。」と1人の中国人女性が自分の生活ぶりを誇らしげに語った。その言葉から、日本の農村地域が様々な面でアジア人の女性たちによって支えられている現状を想像することは、困難ではないだろう。

元留学生の私からすれば、結婚や子育て、介護など多くのことを経験してきた、日本で暮らす中国人女性の先輩である彼女たちとはとても頼もしく思え、出身は中国とはいえども、自立した住民として日本の地域を支えている

ことを実感すると同時に誇りに思った。

◆もう一つの現状、地域で孤立しているアジア人の女性たち

一方、彼女たちからは、地域で孤立しているアジア人女性がいることも聞いた。外国で暮らす決意をしたということは、それなりの覚悟があったのかもしれない。しかし、日本へ嫁いできた彼女たちを待っていたのは、想像以上に厳しい現実だ。信じがたいことに国際結婚に踏み出した夫婦の中には、互いの言語を全く理解できず、唯一の頼みの綱である辞書に頼らなければ、コミュニケーションが取れない夫婦もいるそうだ。一部の地域では、いまだに外国出身のお嫁さんを家庭に受け入れたことを近所に知られたくない風土が根付いているため、彼女たちの存在を隠そうとする家庭もあるときいた。自由に外出することもできず、お小遣い程度のお金も自由に使えない、1日中姑に家事を教わり、苦しい現実耐えている女性もいるという。海の向こうからひとりで渡ってきた彼女たちは、思いも寄らない現実に苦しめられ、どれほど不安だろうか。外見が日本人とほぼ変わらないこともあり、アジア人女性の存在はまだ気づかれていない場合が多いのかもしれない。市町村や地域国際化協会等によるサポートは徐々に増えつつあるが、地域全体としての受け入れ体制は決して万全とは言えない。何より彼女たちを取り巻く現状と、環境改善の必要性を地域の課題として、その地域の住民自体が十分に認識していないことが問題ではないだろうか。

1980年代、多くの20代の独身女性が日本人配偶者として来日した。ここ数年の傾向は主に離婚歴がある子連れ30代女性に変わりつつあるそうだ。日本で自分の生活基盤が整った後、母国から子どもを日本に呼び寄せるケースもあるらしい。言葉すら分からない子どもたちが突然日本に来て、学校で楽しく学べないのは言うまでもない。なかにはいじめに遭

私から見た日本の地域社会・外国人住民の今

う子もいるとのことである。徐々に元気がなくなっていく我が子の姿を見る親の気持ちは、どれほど辛いものなのだろうか。ある女性は、つい先ほどまで普通に話していたのに、子どものことが話題にのぼると突然涙が溢れ、声を詰まらせた。

日本での生活がそれほど難しいのなら、なぜ来日するのかと思う方もいるかもしれない。日本でもっといい生活をしたいと夢を膨らませる女性、子どもの将来のために今後の人生を日本にかける女性など、確かに様々な事情があることは否定できない。しかし、もっと多くの人々に知ってほしいのは、日本側にも彼女たちを必要とする現実があるということだ。事実、農村部の嫁不足を解消するため、1980年頃から、行政主導でアジア人女性の受け入れに取り組んだ事例もある。

中国から来日した女性の出身について、都市生活に憧れる農村部の女性が日本に渡ってくるケースが多いのではないかと想像していたが、多くの方が中国都市部の出身であることが意外だった。さらに、民間の結婚紹介所を通じて、日本に渡ってきた女性が少なくないということに驚かされた。

多くの日本人女性は農作業を敬遠しているため、農村部は嫁不足に悩まされている。日本の農家の独身男性が増加する中で、民間の結婚紹介所がアジア諸国の女性をそれらの日本人男性に紹介し始めた。アジア人女性との結婚を希望する日本人男性は海外ツアーに参加し、現地の女性たちと見合いを行い、双方が合意すれば即結婚が決まるシステムだ。早ければ1ヵ月以内に女性が来日し、一緒に生活するケースもあるという。

民間の結婚紹介所のなかには、仲介手数料を取る営利目的から、機械的にアジア人女性と日本人男性をマッチングするところもあるようで、そのような場合は、結婚後、お互いに錯誤が現れ、うまくいかない場合もあるだろう。また、女性を日本に迎えた後、日本語や生活習慣を習得するためのフォローがなさ

れていない場合がほとんどである。最も身近にいる日本人家族に相談できればよいのだが、夫婦の間で十分に言葉が通じないケースも多いようだ。その結果、結婚が破綻し、家庭でも地域でも孤立した女性が悩んだ末、家を出て、日本の都市部で生活する悲しい現実もあるという。

アジア人女性の存在が見えにくい地域が多いが、国際結婚の増加によって日本のどの地方においても国際化が確実に進んでいるのであろう。特に日本の農村地域はアジア人女性たちによって支えられていると強く感じた。しかし、彼女たちの気持ちになって考えれば、日本での生活はどのように見えるだろうか。日本の地域は彼女たちと共に暮らすための体制が整っていると言えるだろうか。

農家の生活文化に苦しむアジア人の女性たち、そして戸惑う日本人家族の厳しい現状を目のあたりにしながらも、「日本に行きたい」と夢を膨らませる女性と、アジア人女性との結婚を望む日本人男性が後を絶たない。なぜこのようなことが起きているのだろうかと考えさせられ、その現実には驚かすにはられない。中国人をはじめ、(91万人以上の永住者を除き)25万人を超える日本人配偶者の定住化が着実に進む中、農村地域でのこのような国際結婚は、今後も増加し続けるだろう。地域で暮らすアジア人女性及びその日本人家族を取り巻く課題は未解決のまま、更に多様化してくるのではないだろうか。

◆アジア人の女性たち、そして日本の地域の幸せのために

今回、お話を伺った3人の方は、皆日本で苦勞され、数多くの困難を乗り越えてこられた強い女性だと感じた。日本語の学習にしても、日本の生活に慣れるための忍耐と努力にしても人一倍である。例えば、次のようなエピソードがあった。来日して間もない頃、日本式のお弁当の作り方を学ぶため、本を買って一人で練習を繰り返したそうだ。我が子に

日本人の子どもと同じ綺麗なお弁当を持たせたいとの思いから、早朝4時前に起きて、納得できるまで何回もお弁当を作り直したという。彼女たちが地域に溶け込むために、どれほど努力したか、想像できるだろうか。

日本の社会の中で生きるため、彼女たちは懸命に努力を重ねてきた。その結果として、日本語も非常に流暢で、地域にも受け入れもらえるようになった。彼女たちの見た目や動き、考え方まで日本人っぽくなっていることが私にはとても印象的だった。逆に言えば、いつまでも100%の中国人では、日本の社会で生きていけないのかもしれない。そういう意味では、日本で暮らす外国人住民は、母国文化と日本文化の両方を持ち合わせた柔軟性のある新しい存在なのかもしれない。さらに北上市国際交流ルームのサポートを得ながら、徐々に自立した彼女たちは、外国にルーツをもちながら、日本社会にも精通し、地域活動にも参画している。今後、地域における多文化共生社会の実現に向け、貴重な担い手として大きな力になってくれると確信した。

岩手県奥州市にある奥州市国際交流協会（アスパ）の実践が、そのことを証明しているように思う。アスパは外国人住民が生活しやすい地域づくりをめざし、協会独自で多文化共生マスタープランを策定し、多文化共生の地域づくりに取り組んでいる。その取り組みの一例として、「多言語生活支援ガイドブック」があげられる。

ここで強調したいのは、単なる生活情報を多言語に訳すのではなく、外国人住民がその編集に携わっているということである。つまり、日本人が一方的に発信することを避け、外国人住民のことを外国人住民に教えてもらうという考え方である。地域でエンパワーメントされた中国人やフィリピン人女性たちの力を借り、多様な人による多様な視点で「多言語生活支援ガイドブック」が作られたため、より外国人住民にとって役立つ情報を提供することが可能となった。

日本で生活する外国人住民が222万人となった現在、地域と共に暮らし、地域を支える、自立した外国人住民がその地域の真の力になってくれることは間違いない。そのことを市町村や地域国際化協会等の日本の公的セクターが理解し、彼・彼女たちの貴重な経験やスキルを活かせるようにバックアップしていただきたい。そして、地域で共に生活する日本人住民と外国人住民との協働の輪を広げていくことにより、「多様性が豊かさにつながることを実感できる地域づくり」が推進されることを切に願ってやまない。



奥州市国際交流協会作成の多言語生活支援ガイドブック